

福沢諭吉の視点から柳宗悦の視点へ

日朝関係史のバク口型授業を乗り越える試み

『歴史地理教育』465 (1990年12月号) より許可を得て転載

目良 誠一郎

一、バク口型の近現代史授業の反省

私はかつて、一九八四年の第一回東アジア歴史教育シンポジウム(＊)の席上、「バク口型の日本近・現代史授業の反省」と題して、こう発言したことがある。少し長いが、その引用から小論を始めるのを、許していただきたい。

「私は……十五年間、倫理・社会、政治・経済、そして現代社会の授業を担当して来ました。授業の中では必ず朝鮮や中国の問題……を取り上げてきました。ある時期までは主として私たちの父祖が犯した中国・朝鮮への侵略の実態や在日朝鮮人の置かれた状況のバク口が、その内容でした。

／……こうしたバク口型の授業でもそれなりの成果はあったと思います。少なくとも、私は自らの責務をいく分かは果たしたような気分には陥っていません。／しかし、近年の世の中の変化と共に、こうした授業だけでは期待したような生徒の反応を引き出すことはむずかしくなり、無関心、場合によっては反感すら生じてくるようになりました。遅まきながら、私もそうしたバク口型授業のあり方に反省をせざるをえなくなりました。／私が一番反省した点は何かといいますと、脱亜入欧

的な日本近代のアジアに対する醜い所業を指摘する際に、同時にそうした所業に対する批判やそれを克服しようとする努力などをわが父祖たち自身の中から掘り起こし、それを生き生きとした姿で生徒たちに示すことができなかった(また、しようとしなかった)ということでした。／考えてみれば、人間誰しも欠点を指摘されるだけではその指摘がいかに真実であろうとも、素直にすぐ反省はできないものですし、民族といえども同じことではないか、そんなふうにも考えました。……／私は今後生徒の前に、わが父祖たちと同様の欠点を多少なりとも所有している日本人の一人として、生徒たちと共にその欠点を克服するという視点で立たねばならないと、痛切に思いました。

これが、私の反省の第二の大きな点でした。……／……要は、生徒たちの中に、明治以来の日本人の重大な欠点を自覚させるとともに、その欠点を克服したいという意欲、克服できるという展望を生み出すこと、そのことが肝心なことなのでした。／そのためには、第一に自身の超越的な批判の姿勢を改めることが必要でしたし、第二には私たち日本人の中にもそうした欠点を克服できる力と可能性のあることを、

歴史の生きた実例によって示すことが必要でした……。／そうした観点から不十分ながら近年私が教材化に取り組んできたのは、柳宗悦を中心に、浅川巧、柏本義円、吉野作造、石橋湛山といった一群の人々の思想と行動です。それとの関連・対比で、福沢諭吉も大きく取り上げてきました。(＊)

長かった中曽根時代も過去のものとなり、ソウル・オリンピック、盧泰愚大統領の来日などで、一定の変化はあるものの、やはり朝鮮やアジアに対する生徒のなかの問題状況は基本的に変わっていない。拙いものではあるが、私の現代社会の授業(高二・三)ではどんなテーマをどんな材料を使いながらやっているか、生徒たちはどんな反応を示してくれているかなどを紹介することも、まんざら無意味ではあるまい。

二、福沢諭吉の光と影

高二の一学期に「アイデンティティの危機」の問題を生徒の内面により即して展開した後、二学期から日本人としてのアイデンティティを日本近代の歴史のなかで考えてみるというように進めている。年によっても違うが、多くの場合、福沢諭吉から始めてきた。

生徒たちの福沢に関する知識は、ほぼ、慶応大学の創始者と「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の二つに尽きる。「韓国で一番嫌われている日本の政治家は、近世では秀吉、近代では伊藤博文なんだけど、その理由がわかる？」という問いにも、とくに伊藤についてほとんど答えられないが、

「じゃあ、近代の思想家では誰だと思わない？」という質問には、まず答えられない。「実は福沢諭吉なんだよ。」と言うと、生徒たちは「エーッ！」という意外の声を挙げる。

そこから、『学問のすゝめ』初篇・三篇で福沢が、アメリカ独立宣言をうけた「天は……」の人民平等の思想だけでなく、「理のためにはアフリカの黒奴にも恐れ入り、道のためにはイギリス・アメリカの軍艦をも恐れず」とか、欧米の富強な国がアジア・アフリカの弱貧国を侵略・抑圧するのを「カ土が……病人の腕を握り折るに異ならず」と書き、福沢らしい巧みなレトリックできわめて明快に民族の平等をも説いていたことを見る。

「黒奴」の表現には留保をつけるにせよ、この福沢は、「一身独立して一国独立す」「独立自尊」の福沢とともにやはり偉大であることを確認する。

が、その福沢が実はすでに、第一回米国行きの際に会ったハワイの国王カメハメハ四世とその弟について、「土人」「蛮民」の「漁師の親方ぐらゐの者と侮蔑の感情を抱き(＊)、二度目の洋行から南回りで帰る際に目撃した英国の植民地支配の苛酷さには、一方ではインド人や中国人を憐れみながら、もう一方では、「日本人」として一度はあんなふうにならざるを得るならば当のイギリス人も含めてアジア全体を支配してみたいと思っていた(＊)ことを、示す。

そのうえで、「朝鮮の交際を論ず(＊5)」「(一八八二年)と「脱亜論(＊5)」「(一八八五年)の二つの論説を読んでもらう。その言わんとするところが分かってく

ると、生徒たちの福沢観は一変し、ようやく何ゆえに韓国の人たちから福沢が忌み嫌われるのかが、理解される。

伊藤博文のお札がやっとなくなつたら、今度は福沢のお札を出して怪しまない僕たち日本人を、隣国の人たちがどう怪んでいるかも、紹介する。

あまり単純化され過ぎて困るので、ひろたまさきさんの研究(*)などを基に、福沢の国内認識・人民観と対外認識の変遷を「福沢論告の光と影」と称するプリントにまとめたり、ダメ福沢一辺倒にならないよう、偉大な福沢弁護者丸山真男さんの評論(*)を使つたりもしている。

三、朝鮮を愛し、愛された柳宗悦と

浅川巧

脱亜論の主張は別として、福沢諭吉の名を知らない生徒はいないが、柳宗悦やまして浅川巧の名前だけでも知っている生徒は皆無である。それは、私たち大人の反映だろう。

「朝鮮民族に対する柳の愛は、青年の幻想自己肥大的な片思いの熱しやすくさめやすい奇形的な恋情ではなく、尊大さや卑屈さとは無縁の人間の共感に深く根ざした揺らぐことのない、しかも若々しい愛情でした。／明治以来の日本人の大多数は、何と多くの癡癡的な対外的な「恋の病」に陥り、愚かにそこからさめたことでしょうか。……私もまたそうした病の経験者の一人として、同じ日本人である柳の目を見張るようなそのしなやかさと勁さに深い感動を覚えたのです。／明治以来の脱亜人欧的な偏狭さを子どもたちと共に

克服して行くためには、日本近代史の中にこうした感動の実例を多く掘り起こし、教材化して行くことの大切さが、ますます身に沁みるばかりでした。(*81)

そういう理由から、福沢と対照してまず柳宗悦と浅川巧をとり上げてきた。柳宗悦は、白樺派同人の宗教・美学者で、民芸運動の創始者としてある程度知られているが、その彼が民芸運動を志した基に、朝鮮の民芸への関心があり、その関心を育て、手引きしたのが、朝鮮総督府林業試験場の無名の技師浅川巧だったことを知る人はほとんどいない。浅川が一九三一年に四〇歳の若さで急死したとき、柳はこう書いている。「浅川が死んだ。取り返しのない損失である。あんなに朝鮮の事を内から分かつていた人を私は他に知らない。ほんとうに朝鮮を愛し朝鮮人を愛した。そうしてほんとうに朝鮮人からも愛されたのである。……彼がいなかったら朝鮮に対する私の仕事は其半をも成し得なかつたであらう。(*82)」

浅川に助けられ、朝鮮の工芸美術とそれを生み出した朝鮮民族への深い敬愛の念をいだくようになった柳は、一九一九年の三・一独立運動への日本官憲の苛酷な弾圧とそれへの日本知識人の沈黙に抗して「朝鮮人を想う(*83)」という不朽の文章を発表して以来、日本の朝鮮植民地支配への鋭い批判を続けた。前記の第一回東アジア歴史教育シンポジウムで、私の質問に対して、韓国の李光麟さんが「韓国人で柳先生や浅川巧の名前を知らない者はいない」と切るように断言されたことが、いま

も重く胸に残(*84)っている。

授業では、柳については、武田清子さんの広い視野と体験に裏づけられた平明な文章(*)を、浅川については、敬愛する詩人茨木のり子さんの珠玉のような文章(*)を、いまは使っている。このほか、戦闘的自由主義者石橋湛山の、明快・実利的(?)な植民地放棄、民族自決権の主張(*)は、生徒たちの驚きと共感的になるが、省略する。また、現在、本格的に教材化を考えているのは、盧泰愚大統領の来日の際のスピーチで一躍有名になった、朝鮮文化・言語への尊敬を基に朝鮮との平等互恵の外交を貫こうとした、江戸中期の忘れられた思想家・雨森芳洲(*)や、牧原憲夫さんが近年発掘・紹介した、明治初年に非征韓論的朝鮮外交を試みた忘れられた外交官・吉岡弘毅(*)さらには、幕末維新期にアイヌ人への人間的共感から和人の侵略的横暴を鋭く暴露し、抗議した松浦武四郎(*)などである。

四、教育の恐ろしさと素晴らしさと

ところで私はあまり勤勉でないこともあって、一時間の授業や一つのテーマごとに勝負するというより、二年間を通して、行きつ戻りつ、ゆっくりと、現代日本と世界に生きる生徒たちの興味・関心に応え、あるいは引き出すことを目指し、できるだけ新鮮・多様な情報を提供して、それらを彼ら自身の問題として受け止め整理し、その解決可能性の展望と意欲を少しでも持つてくれることを願って、授業を行っている。

高二の二学期で日朝関係のほかにアジア諸国との関係をとり上げたうえ、三学期にはさらにそれらの問題を一口ンブス以来の欧米近代史と重ね、その第三世界への侵略的な側面に対する批判をインディオや黒人への人間的共感から鋭く展開したラス・カサス(*)やモンテーニユ(*)の視点から再検討している。高三の一学期では近代民主主義と人権の諸問題を軸に政治を、二期には南北問題、環境問題、豊かさとはなにか、などを軸に経済を展開している。

私の勤務校は東京の真ん中のいわゆる有名私立受験高校で、幸か不幸か、生徒たちは私の授業以外に小学校以来まったくといっていいほどこの手の授業を受けたことがない。勉強とは受験勉強、社会科はもちろん「暗記物」と思い込み、授業も受験に役立つかどうかだけでまず判断するといった生徒たちだから、私のような授業でも生徒たちはけっこう新鮮に驚き、そして興味を持ってくれるが、これはいわば「敵失」で稼いでいるようなものである。以下の生徒たちの感想は、数年前に、高三最後の授業の終わり一五分ぐらいの短い時間に書いてもらったものだが、以上の点を割り引いてお読みいただきたい。

「二年間の授業で学んだことで、一生自分の心に残るだろうと思うことは、大変多くありました。二年の一学期に教わったことは僕に新たな人間観を与えてくれて、それまで「生きる」ということについて抱いていた疑問の数々の多くを解決してくれました。また、ア

アジア・アフリカについての授業では、世界の動向についての幅広い視野を持つことを覚えさせた。」(A君)

「先生のおかげで、毎日安穩と生活している僕にも、この現代の社会には光の部分もあるけれど、それ以上に影の部分があるのだな」ということを実感し、今の社会のままでもいいのだろうか。もつとより良い方向があるじやないか」という問題意識が生まれました。これは、みんなもそうだと思う。しかし、一番大事なのは、それぞれ得た問題意識をこのまま保持し、それぞれの分野でそれぞれのできる範囲で、これに働きかけ、改善してゆく努力が必要だと思う。そのためには、やはり「勇気」が大切なのではないでしょうか。社会の大勢に抗してゆく「勇気」へ自分の正しいと(思う)ことを最後までやり通す「勇気」。(D君)

「自分のアジアに対して抱いていた汚くて貧しく野蛮であるというイメージも解消されるようになり、各国の民族・文化は尊重すべきであるという考えに近づいてきた。そして今まで抱えてきたマイナスのイメージは、逆に自分たち日本の影響の大きいことにも気がついた。」(M君)

「外国と聞くと欧米諸国しか頭に浮かばなかった僕が、現社の授業を通してアジアにも関心をもつようになったのは確かです。最初は「朝鮮なんか」などと考えていましたが、今では大学に行ったら朝鮮語を学ぼうなどとも考えています。このことははっきり言って、現社の授業の影響です。」(K君)

「中学の時から何か頭の中にあって

表現できないことがありました。二年になって先生の授業を受けて、いろいろ共感するところがありました。人種問題や差別の問題などに、特に興味を覚えました。……受験体制の中にあつてこれだけの授業をうけられたことを誇りにしたいと考えます。ともすれば忘れがちな在日朝鮮人・中国人の問題などを考え、真に彼らを受け入れることの意義を考えてみたりしました。授業をへていくにしたがつて、稚拙ではありますが自分なりの考え方や物の見方ができてきました。……大学に入ったら、人間の権利や自由について勉強したいと思っています。」(N君)

もつと論理的に、深くつっこんで書いてくれた生徒も何人もいる。あえてそれは引用しなかった。ここに引用したのは、どちらかというと、教員仲間や場合によっては生徒たち自身によって「どうしようもないクラス」とか、「どうしようもないヤツ」と思われていた生徒たちの感想である。あらためて、教育の恐ろしさと素晴らしさを思わせるをえない。

《注》

(1) この第一回シンポジウムの記録は、比較史・比較歴史教育研究会編『共同討議／日本・中国・韓国(自国史と世界史)』ほるぷ出版、一九八五年。なお、昨年、朝鮮民主主義人民共和国の研究者も加えた第二回シンポジウムが開かれ、同研究会編『東アジア歴史教育シンポジウムの記録(仮題)』(未来社)が来年春に刊行の予定。

(2) 同前書、一五〇～一五二ページ。

鈴木亮「国際化教育と世界学習」『歴史地理教育』四三六号八～八三ページ参照。

(3) 福沢諭吉『福翁自伝』

(4) 「東洋の政略果して如何」(一八八二年)『福沢諭吉選集』第七卷所収、岩波書店、一九八一年。なお、注(3)

(4) については、鈴木亮『大きなうそと小さなうそ』日本人の世界史認識』八〇～八五ページ参照、ほるぷ出版、一九八四年。

(5) 同前『選集』第七卷、岩波書店。

(6) ひろたまさき『福沢諭吉』朝日新聞社、一九七六年。

(7) 丸山真男『福沢諭吉』「福沢に於ける秩序と人間」『戦中と戦後の間』所収、みず書房、一九七六年。

(8) 前掲『共同討議／日本・中国・韓国』一五三～一五四ページ。

(9) 高崎宗司編・柳宗悦『朝鮮を想う』二〇二ページ、筑摩書房、一九八四年。

(10) 同前書所収。

(11) 前掲『共同討議／日本・中国・韓国』一五五ページ。

(12) 武田清子『笑いを失った朝鮮の人々』『わたしたちと世界』所収、岩波ジュニア新書、一九八三年。なお、この文章には、柏木義円についてもふれてある。

(13) 茨木のり子『忘憂里』『ハンブルへの旅』所収、朝日新聞社、一九八六年。朝日文庫版、一九八九年。なお、高崎宗司『朝鮮の土なつた日本人』浅川巧の生涯』参照、草思社、一九八二年。

(14) 松尾尊允『大正デモクラシーの

頂点・石橋湛山』「歴史地理教育」三四五号、同編『石橋湛山評論集』岩波書店、一九八四年、増田弘編『小日本主義』石橋湛山外交論集』草思社、一九八四年、など参照。

(15) 上垣外憲一『雨森芳洲』元禄享保の国際人』参照、中公新書、一九八九年。

(16) 牧原憲夫『天下国家から各箇各別へ』吉岡弘毅の精神史』参照、『明治七年の大論争』建白書から見た近代国家と民衆』所収、日本経済評論社、一九九〇年。

(17) 花崎皋平『静かな大地』松浦武四郎とアイヌ民族』参照、岩波書店、一九八八年。

(18) 染田秀藤訳『ラス・カサス』インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波文庫、一九七六年、石原保徳訳『ラス・カサス』インディアス破壊を弾劾する簡略な陳述』現代企画室、一九八七年、染田秀藤『ラス・カサス伝』新世界征服の審問者』岩波書店、一九九〇年、など参照。

(19) 原二郎『モンテーニューエセーの魅力』一八五ページを参照、岩波新書、一九八〇年。

【注1の補注】

一九九一年七月に『アジアの「近代」と歴史教育(続・自国史と世界史)』と題して刊行された。なお、このシンポジウムは一九九四年に第三回が開かれ、その記録『黒船と日清戦争 歴史認識をめぐる対話』(未来社、一九九六年)が刊行されている。さらに一九九九年に第四回が開かれ、その記録も刊行が準備されている。